



嫉妬と独占欲

箱庭の樂園
画 夏目青

義兄の狂愛

Presented by 箱庭の楽園

あらすじ

初めてできた彼氏と家でいちゃいちゃしていると、
母親の再婚でできた義兄の涼が突然帰宅した。
まゆが彼氏におっぱいを吸われて喘いでいる姿
を見た涼は豹変し、まゆの処女を奪い、
倒錯した欲望をぶつけるようになるのだった。

character



涼 29才

外資系金融機関勤務。

まゆの母親の再婚相手の息子。

幼い頃からまゆを溺愛。

外面はよいがサイコ気質の変態。

まゆのことを所有物だと思い込んでいる

アブない人。

まゆの体に異常に執着している。

好きな作家は団鬼六。

まゆ

彼氏と自宅でエッチなことを

しているのを涼に見られて

嫉妬からそのまま処女を奪われる。

以後、毎晩開発されて涼なしには

いられない体に。

真面目だが無自覚な淫乱体質。

自己肯定感が低く流されやすいチョロイン。



プレイ内容

①不純異性交遊を咎められスパンキング
指入れ処女確認

②浴室にて
乳首責め クリ責め
剃毛 クンニ ローション素股

③乳首責め クリ責め 処女強奪

④義兄宅にて軟禁生活 裸体撮影会 脳イキ
クンニ 生挿入 中出し

⑤放置プレイからの自慰強要&溺愛セックス

⑥玩具挿入 フェラ 生挿入 ポルチオ開発
潮吹き 中出し
など

おまけSS
まゆ女子大生編
目隠し緊縛&オイルマッサージ

義兄の狂愛

Presented by 箱庭の楽園

一章 嫉妬と独占欲

「はい。これ借りてた本。送ってくれてありがとう」

「ん、じゃまた明日ね」

まゆは、最近付き合いはじめた彼氏の和也の寂しそうな顔を見て、まだ少し一緒にいたいと願ってしまふ。

「あの——少しだけお茶してく？」

両親は夜中まで帰らない。ちよつとためらってから聞いてみた。

——でも和也くん、真面目だし。お茶だけならいいよね。

「女の子の部屋、甘いにおいがする」

部屋に上がった和也は緊張した面持ちで言った。

「そんなことないよ。ほら、アロマを毎晩焚いてるから」

「アロマってさ……催淫作用あるって言うじゃん」

「えっ？ さいいん？」

どういう意味か一瞬わからなかったが、しばらくして、エッチな意味だと気づく。

普段なら和也は下ネタも言わないタイプだ。

「ふざけないで」

冷たい麦茶の入ったコップを渡すと手と手が触れ合った。どきりとする。

まだ二人は、軽いキスを何度かしたただけだ。

進んでいる同級生は、もう経験済みだが、和也はそんなにながつがつしたタイプではないし、二人で図書館で勉強したり、一緒に買い物したりするだけで幸せだった。

だから、そういうことはまだ先だと思っていた。

「ふざけてなんかないって」

ふいに手を掴まれて、驚いて見ると、目が真剣だった。
怖くなつて、目を逸らす。

「あのさ。まゆ、今日お母さんいないんだよね？」

「え？　そうだけど」

「男を家に上げたら怒られるんじゃない？」

「だってお茶するだけだし」

「はあ……いつまでも俺がおとなしくしてると思ふのかよ」

「か、和也くん？」

そのまま、ベッドのほうへ押し倒し、和也はまゆにキスをした。

いつもと違うのは、舌まで入ってきて口の中を掻き回されたことだ。

「うっ……ふああ」

「まゆー、えっちな声出して、かわいい」

そのまま、覆い被さるようになりに乗られて、抵抗できなくなる。

——どうしよう。

「んーっ！」

あまりに夢中で口を吸われて息が苦しくなる。

どんどんと和也の胸を叩いて、やめてほしいとアピールする。

「ははっ。ごめん。かわいくて」

「こんなことするつもりで家に来たの？」

「いやー……そんなことないけど、二人つきりで、我慢なんて無理だよ。誰だつてそう」

「そ、そうなの？」

まゆには、親の再婚でできた年の離れた血の繋がらない義兄がいるだけだから、同じ年頃の男の子のことはよくわからない。

ただ義兄には、幼い頃から男には気を付けろと言われていた。

——女の子のくつつきたい、甘えたいみたいな愛情からくるものと、少し

違うのかも……。

いつもよりぎらついた目をした和也は、再び抱きつくと、まゆの首筋に唇を当て、どンドン吐息が荒くなっていく。

様子がいつもとちがくて、少し怖くなる。

「なあ、少しだけだから——ちよつと触ってもいい？」

飼い主に従順な犬みたいになひたむきなまなざしに、胸がきゅんとする。

「す、少しだけなら」

そういうと、制服の上から胸を揉まれ、思わず吐息が漏れてしまう。

「気持ちいい？」

「わ、わかんない」

正直よくわからなかったが、和也はどンドン興奮した様子で、制服をたくしあげてきた。

「ちよ、調子に乗らないでよー」

わざと明るく言うが、和也の欲望スイッチは完全に入ったようで、夢中で

下着越しに胸を揉みしだいている。

「まゆさー、わりと胸おつきかったんだな」

最近急に大きくなってきた胸がコンプレックスで、通学電車で痴漢に合わないように小さく見えるきつめのブラをつけていた。

「ね、そろそろ終わりにして」

「無理。ブラ外す」

「ちよっと！ 待って」

止めた時には、もう遅くて、剥き出しの胸を見られてしまった。

和也は、感動したように、じっと見入っている。

「乳首かわいい」

「あつ。やあつ」

指で摘ままれて、声が漏れた。

指先でこしょこしょと乳首をいじられて、妙な気持ちになってしまう。

「やあ、あん……」

「やっべ。興奮してきた。たまんね」

両手で胸を掴んでは、乳首を痛いほどいじくりまわされた。

最初よりぷっくりして硬くなった乳首に、和也がむしゃぶりついた。

「やめ、いやあ」

餓えた獣のように、貪る姿には、普段の理性的で優しい彼の面影はない。

身をよじって抵抗しても、女の力では勝てず、部屋に二人の吐息と、吸引音が響く。

夢中になって吸われると、体に力が入らず、されるがままになってしまった。

「気持ちいいの？ まゆ」

「ちよ、もうほんとにやめよう」

「もっと吸うから、もっと気持ちよくなって」

初めての経験にどうしていいかわからない。胸の先がじんじん痺れて、もうわけがわからない。

だから、家の中に、誰かが入ってきたことなんて気づかなかつた。
「なにをしてる」

扉を開く音と同時に、冷たい声がした。

見ると、普段は会社の近くで独り暮らしをしている義兄の涼がいた。

「わっ！ すみません！」

和也は飛び上がり、荷物を持って「失礼しました」と風のように去っていった。

涼の身長は188センチあるし、昔は空手などもやっていて、筋肉質で顔つきもいかついから、怖がるのも無理はない。

まゆは一人残され、乳首まで晒された格好で呆然としていた。和也の唾液で濡れて赤く腫れているのに気づいて、急いで着衣を整える。

「涼くん……」

どうして急に帰ってきたのだろう。土日にたまたま帰ることはあっても、平

日の夕方に来ることはこれまでなかった。

その険しい表情を見て、叱られることを覚悟した。

二章 義兄のお仕置き

「なにをしてた？」

「ごめんなさい……」

「なにをしてたと聞いている」

「彼氏にお茶を出そうと思って、部屋に呼んだの」

まゆの母親は性的なことに嫌悪感が強く、少女漫画で少しでもそういうシーンがあると取り上げられ、きつく叱られた。

家で男の子とあんなことをしていたと言われたら、どんなに罵られるかわからない。

「彼氏？ まゆちゃんが誰もいない家で、あんなことするなんて思わなかったな」

「お母さんには言わないで」

震えながら頼むまゆを見る涼の目が冷たい。

涼は、昔からまゆには甘かった。

厳しい母親に叱られ萎縮するまゆを常にかばい、優しくしてくれた。

再婚した夫への気遣いからか、まゆに対する当たりが昔からきつい。

なかなか義父に懐けず、居場所のないような気がしていたまゆに優しくしてくれたのは涼だ。

具合が悪くても言い出せず、無理をしていると、いつも気づいてくれるのも涼だけだった。

——嫌われた。軽蔑された。

どうしてあんなに迂闊なことをしてしまったのかと、今さら後悔する。

「まゆちゃん、いつもあんなことしてるの？」

「してない……。今日は貸してた本を返してもらったついでにお茶を出しただけ」

「男が女の子と二人きりになって、お茶して帰るわけないでしょ」

そんなことは知らない。本当にお茶を出すだけのつもりだったのに、叱られて悲しい気持ちになる。

「もうしないから、お母さんに言わないで……。心配かけてごめんなさい」
まゆに甘い涼なら、きつとすぐに許してくれるだろうと思っただが誤算だった。

「部屋の外まで喘ぎ声漏れてたよ」

恥ずかしいことを言われ、耳まで赤くなる。

あんなところを家族に見られるなんて、死んでしまいたい。

「ご、ごめんなさい……」

ぼろぼろと涙を流す。

「普段からセックスしてるの？」

ふるふると首を振る。キス以上のことをしたのは今日が初めてだ。

「ほんとかな……。まゆちゃんが不純異性交遊するなんて思わなかったから、

僕もショックだよ」

「最後まではしてない……」

「確認するよ」

「え……？」

そう言うときまゆを押し倒し、足を開かせた。

「下着、濡れて透けてる」

呆れたようにそう言いながら、下着の上から秘裂をなぞってから、下着を脱がせると足から引き抜いた。

「糸引いてる。おっぱい吸われて気持ちよかったんだね？」

突然のことにわけがわからない。そんなところは、和也にだって見せていない。

割れ目に視線を感じて、恥ずかしくて、足を閉じようとする時、

「これはお仕置きだよ、まゆちゃん」

ぴしゃりと言われる。こんなに怖い声を聞いたことがない。いつだってまゆには優しかったのに。

恐ろしさに身動きできずにされるがままになってしまう。

涼はそっと剥き出しの秘裂に手を這わせた。

「こんなにぬるぬるにして、処女なんて嘘じゃないの」

ゆっくりと、内部を確認するように指が入ってくる。異物感に恐怖心で、膝を震わせた。

「狭いな。嘘ではなさそうだけど、もう少し調べないとわからないね」

恐ろしさに、無言でやめてくれるのを待つ。内部に入った指がゆるりと体内を撫ではじめた。

「指、抜いてえ。んあ、ん」

「さっきもやめてって言いながら、そうやって甘い声出してたよね。そう言うとうと、男が余計やりたくなるって本能で知ってるんだね」

意味のわからない言いがかりに、言い返す気力もなく、体の中を他人にいじくり回されるといふ辱しめにひたすら耐えた。

入り口の近くを撫でるように触れられると、不快感がなにか別のものへ変わっていく。

「やっ。やめてえっ」

「僕が思ってたより、いけない子だね。まゆちゃんは。ちよっとお仕置きするよ」

ぬちやぬちやと指を抜き差しされるたび、部屋に卑猥な音が響く。

最初は辛いだけだったが、涼がまゆの反応を見ながら、弱い場所を探り当てて、執拗に撫でつけるため、時々甘い声が漏れてしまう。

「やめてって泣きそうなのに、気持ちいいの？」

「よくないっ」

「ぐちやぐちやになってきたけど」

こんなふうにいじられたら、嫌でも多少反応してしまうのは仕方ない。情けなさに泣きながら、喘ぎ声を漏らして、涼の仕置きに耐える。

「も、許して……」

「駄目だよ。まゆちゃんが悪い子になったら、僕の責任でもあるからね」

二本目の指が増やさされ、中を撫で上げる。身体の奥が疼いて淫らな蜜がどんどん入り口から溢れてくる。

「ふっ。ふああん。そこいじっちゃやだ」

「感じるから？ 彼氏じゃなくても感じるの？」

「ちがっ」

中に指を入れたまま、クリトリスを撫で始めた。

自分でするよりずっと的確な力加減と動かし方で、まゆは太ももを震わせて快楽に耐えた。

「あつ。ああ……ん。なんでそこ、だ、め……」

「指食いしめて離さないけど？」

「そんなことしてない……っ」

ゆっくりと規則正しい動きでまゆがどんどん追いつめられていく。

お腹に溜まった熱が爆ぜそうで、無意識に腰を揺らす。

あと少しで絶頂に達しそうな時、指を引き抜かれた。

「あっ？」

「ん。寂しい？ ひくひくしてる。イっちゃったらお仕置きにならないから

ね。辛くても我慢して」

涼はベッドに座り、まゆをうつぶせに抱き抱え、スカートをたくしあげると、お尻を丸出しにした。

「まゆちゃん、ごめんなさいは？」

「ご、ごめんなさい」

「なににたいして？」

「家族に内緒で男の子を部屋に入れてごめんなさい」

「二度としちゃいけないよ」

パンと音がして、お尻を叩かれたのだと知る。体の痛みより精神的な衝撃で、心が凍りついた。

「ひっく、うええん。ごめ……なさ」

泣き出したまゆを、涼はさらに追いつめる。

「期待してたの？ ああいうこと」

「してない。してません」

「……感じた？」

感じてしまったなんて言ったら、もっとひどいお仕置きが待っている気がする。必死に首を振る。

「うえっ。もうしない。しないからあ」

「さつきより濡れてる。お尻見られて興奮した？ それとも打たれるのが好

きななの？」

そんなわけはないと思いつつ、下腹がじんじんと疼いて、こうしている今も足の間がぬるついてくる。

「ぬ、濡れてない」

「見てみる？」

涼がまゆの肉髀に手を触れ、濡れた指を見せつけた。

「じゃあ、気持ちよくなってごめんなさいして」

「ごめんなさい、えっちなこととして、気持ちよくなってごめんなさい」

「お尻叩かれて、感じてごめんなさいは？」

これ以上ひどいことをされたくなくて、言いなりになるしかない。

「お尻叩かれて感じちゃって、ごめんなさい……あつ」

謝っている間にも、打たれた。

「まゆちゃん、いい子になれる？」

「なる……約束する」

言っている間も何度か尻をきつく打たれ、泣きながら気を失ってしまった。ほんの数分だが、目を覚ますと、ベッドの上で涼に抱かれて眠っていた。

「痛かった？」

「うん……」

すっかり怯えて、落ち込んでいた。

素直に言うとは、よしよしと頭を撫でられ、おでこや頬にキスをされた。

「赤くなってるから、手当するよ」

冷たいタオルをお尻に乗せられ、ヒリヒリとした部分を優しく撫でられる。

ひどいことをされたあとなのに、触り方がこれ以上ないほど優しく、その落差にわけがわからなくなる。

抱っこされて髪や背を撫でられ、まゆは涼の胸に抱き寄せられた。

「僕が怖くなった？」

知らない一面を見て、怖くなったのは本当だ。

——でも抱っこされるの気持ちいい。

年頃になってからはしなくなったが、幼い頃は、よく抱っこしてもらった。

お風呂も一緒に入ったし、母に代わってまゆの欲しいものは、なんでも買ってくれた。

年の離れた血の繋がらない異性に溺愛されて、好意や憧れの気持ちを持たないほうが難しい。

でも自分のことを女として見てくれないのもわかっていた。

涼には常に女の影があった。しょっちゅう女性から電話も来たし、家に女性_性が来たこともある。

男らしいが色気のある美貌と、たくましい体躯で女性からでもないはずはない。

彼氏を作ったようやく、涼を諦められると思ったが、軽蔑されるのは辛い。

あんな恥ずかしいところを見られて、消えてしまったかった。

三章 浴室にて

「シャワー浴びようか」

確かに汗やらなにやらで汚れている。

涼に抱きかかえられて、浴室へ向かう。

「自分で脱げるから！」

「駄目だよ。まだ確認が終わってない」

一体なにを確認するといふのか。

脱衣所でぼうっとしていると、涼まで脱ぎはじめた。一人で入ると思っていたので驚いて聞いてみる。

「ど、どうして」

「まゆちゃんの体、洗うよ。あいつの唾液がついてるし」

和也に胸を舐められたことを言っているらしい。

まゆの服を脱がし、ブラを外すと胸の周りを撫でた。

「あ、噛み痕。童貞は駄目だね。加減を知らなくて。痛かったでしょ。僕が帰らなきゃろくに前戯もしないで、突っ込まれてたよ」

さっきまゆを打ったことなど忘れたように和也への非難を呟いている。

まゆが望んだことではないのに、男二人からされた横暴を責められ、その理不尽さに落ち込んで来た。

「涼くんに叩かれたところも痛い」

「ん、お風呂から出たら軟膏塗ってあげるから」

しれっと呟いた涼がボクサーショーツを脱ぎ捨てると、凄まじい大きさのそれが天に向かってそそりたっているのが見えた。

禍々しいほど卑猥なそれを見て、思わず目を疑った。

——これはなに？

「どうしたの？」

「な、なんでもない」

見なかった振りをして、そのまま浴室に入る。

さつきからずつと異常な状況だが、なんだかもう抵抗しても無駄な気がして流れに身を任せることにした。

「昔みたいに洗ってあげる」

熱いシャワーを頭からかけられ、シャンプーをされる。美容室以外で人に頭を洗われたことなどない。

ごつごつとした大きな手が、頭皮を優しく撫でる。

——気持ちいい……。

明らかに異常な状況なのに、その指の動きに陶醉してしまふ。

「気持ちいい？」

「うん……」

頭を熱い湯で洗い流されると、頭が少しすつきりする。

「体も洗うよ」

「えっ！ 自分でやるからいいっ」

「駄目だよ。きれいにするから」

体中にソープを塗りたくられ、胸の裾野から持ち上げられる。

「ここ膨れてるのあいつに吸われたせい？ まゆちゃんがそんなに淫乱だと思わなかった。鏡見て」

風呂場にある鏡には、確かにぶつくらと腫れた乳首が映っている。

後ろに立った涼が、体に手を回す。

「ごめんなさい……許して」

「もうしない？」

「しない、しないから」

泡だらけの胸を大きな手が上下して擦る。敏感な中心に触れそうに触れな
いのが逆に卑猥に感じて、吐息が荒くなってしまう。

「どうしたの？ はあはあして」

「そこっ、自分で洗うからいい」

「触ってないのに、勃ってるね。期待してない？」

「んんん…っ」

胸の周りを洗っていた指が、乳輪にまで近づいて、乳首を軽く弾いた。
泡のせいで摩擦がほとんどなくて、乳首の上を何度も指で擦られた。

「いやあ、やめて」

「しっかり洗わないと駄目でしょ」

くりくりと刺激され、立っているのが辛くなる。

「ここ、吸われたの今日が初めて？」

「う、うん」

「はあ……やっぱり許せないな」

そう言いながら、涼はまゆの乳首をつねった。鋭い刺激にのけざると、後ろから抱き止められて、体がより密着した。

「まゆちゃん。いつまでも幼いままだと思ってたのに。こんないやらしい体の子と二人きりになったら襲うに決まってるでしょ？」

そう言いながら、顎を掴まれ唇を塞がれた。呼吸もできないような激しいキスだった。

「うっ。ふあっ……」

舌を引きずり出して、きつく吸われると蕩けそうになる。

頭がくらくらするのは、浴室に張られた湯から出る湿気や熱気のせいだけではない。

——私の舌が、涼くんの口の中に……。

そう思うと、なぜか腹の中がきゅんとして、足の間が濡れてくる。

舌を歯で挟まれて、緩急をつけて吸われると酔ったように頭がぼうつとしてきた。

「はあっ……。やだあ！」

「どうして？ 蕩けそうな顔してるのに」

口を塞がれたまま、石鹸でぬるついた胸の裾野や、脇下をくすぐるように触れられ、我を失い喘いだ。

「下手な男は、いきなり胸やら股間を触るんだけど、女の子の性感体は、全身なんだよ」

囁きながら、耳たぶを唇で挟まれ、体に弱い電気が走ったような感覚がし

た。

柔らかく唇で刺激しながら、耳の輪郭を舌でなぞる。

「指だつて、感じるんだよ。やり方次第で」

泡にまみれた手指の股を一本一本なぞり、耳元で囁きながら、最後は舌を耳穴に突っ込まれた。

脳内を犯されたような音と、涼が体を洗う音でいつもの浴室が非現実的なものに思えた。

「ふえ……もう許して……」

触れられるだけで、脳が蕩けそうに気持ちいい。耳の中に淫らな水音が響く。

足元から崩れ落ちそうになるのを後ろから抱き止められると、腰に熱くて硬いものが当たっているのがわかる。

「全身、洗ってあげる」

浴室のチェアにまゆを座らせ、床に膝をつけて足の先までゆっくりと泡を馴染ませ洗いはじめた。

優しく弱い刺激でも、人に本来触られることなどない場所だから、敏感だ。

「ああん、指の間いやあ」

「くすぐったい手前くらいが気持ちいいんだよ。僕が教えてあげるからね」

足の指の間を、涼の指が入ったり出たりする。洗っているといえれば洗っているだけだが、ひどく卑猥なことに見える。

くすぐったさに、足を動かすと、秘めなければいけない部分を見られてしまふ。

「あつ、は、恥ずかしい」

「恥ずかしくないよ。昔も一緒によく入ったし、体も洗ってあげたし」

「でも、それは……」

まだ幼稚園か小学校低学年の頃の話だ。

「ふくらはぎも洗うよ」

そう言つて膝裏なども洗われ、太ももまで触れられると、必死に足を閉じた。

「そこまでいい」

「ん、太もも、ぬるぬるしてるけど、これなに？ まだ石鹼つけてないよね」
足の間を覗き込まれて、尋問される。

「せ、石鹼のせいだもん」

「嘘つき。まだここにはつけないけど、一回流そうか。泡がここに入ったら染みるものね」

秘部にシャワーを直接かけられてしまう。水圧が絶妙で、まゆは喘いだ。
「シャワーで気持ちよくなる女の子もいるみたいだよ。したことある？」
「ない、ない」

「じゃ、別の方法でしたことは？」

「……」

「……あるんだ。やっぱり悪い子だね。どうやってしたの？」

時々どうしようもなくなつて、涼を想像して自分を慰める夜があった。

一人でしたことがあるなんて言えない。しかも涼を想像してしたことがあるなんてもつと言えない。

「そう……言えたらやめてあげようと思ったのに。まゆちゃんみたいな淫乱には、もう少しお仕置きしたくなるな」

涼が後ろに回り、椅子に座ったまゆの足を鏡に向かって思いきり開く。

自分でもそんなにきちんと見たことのない部分だった。羞恥のあまり、正視できない。

「見ちゃやだあ」

「自分でここ弄つてるの？　この小さな粒。ちっちゃくてかわいいけど、

「敏感だよね」

「ないっ。ないからやめてえ」

指でくりくりといじられて、まゆは腰を揺らして耐えた。

「ちゃんと見て。皮かぶってるの、剥いてみようか」

自分の体がどうなっているかなんて知らない。

「あっ！」

二本の指で、押すように圧迫すると赤い身が出るのが鏡越しに見えた。

「直接触るよ。敏感なところだから、まゆちゃんの愛液で濡らしてからね」

割れ目に手をやり、指を濡らしてから、そこを円を描くようにゆっくりと撫でた。

「ひあっ。やあん」

「まゆちゃんは危機感が足りないから、少し勉強が必要じゃないかな」

涼が肉襞を左右に開くと、慎ましい入り口が鏡越しに見えた。

「中もピンクなんだ。こんなにいやらしい体して、本当にいけない子だね」
「ああん、ああんだめえ」

敏感なところを執拗に撫でられると、中からぬるぬるとした液体が溢れて、わけもわからず腰を揺らしてしまった。

鏡越しに、うっとりとして秘部を眺める涼の目に狂気を感じ、まゆはぞわりと震えた。

そもそもこの状況がおかしい。

不純異性交遊するなど言いながら、涼はまゆを好き放題にしている。

叱るだけなら、浴室で丸裸にして体をいじり回す必要などないからだ。

「いや……！！ 怖い！！」

逃げだそうとすると、ぐっと手首を掴まれた。まゆの知らない男の力だった。

「やめて！ どうしてこんなことするの」

いつもは優しい義兄だ。だからこそ好きで、諦めきれず、別の人を好きになろうとした。

それなのに。

「一回イっておこうか？」

「ふえっ？」

床に跪いた涼が、まゆを無理やり立たせて、自分の顔の前にまゆの股間が来るようにした。

恥毛を掻き分けて、小さな粒を探しだすと、再び皮を剥いた。

「はー、まだ小さくてかわいい。ここ吸ってあげようか？ ん？」

「な、なに言ってるの」

涼の正気を疑う。

首を振るが、腰を腕で固定され、涼は敏感な部分に狙いを定めて舌を絡めた。

「嘘っ……」

「んー、硬くなってる。体洗われて、興奮した？」

「ああん。やだあ、吸わないで」

「中からどんだんぬるぬるしたの出てきてるよ」

「割れ目からこぼれる蜜に舌を伸ばしごくごくくと飲み干すと、再び突起を吸いはじめた。

狭い浴室に涼がちゅうちゅうとそこを吸う音だけが響く。

「はあっ……はあっ。いやああああ」

中に指を出し入れされ、音が一層激しくなる。

指を曲げ、まゆの弱いところを探そうとしている。

「ほら、ちゃんと言って。くちゅくちゅされるの好きだって」

「好きじゃないい」

「じゃ、なにが嫌なの。ちゃんと説明して」

「ま、まゆのそこ舐めないで……」

「そこじゃわかんない」

体内に入ってきた涼の中指が、まゆの弱点を探りあげた。

「あ、ここだね。押すと中が締まる」

涼が中指で内部を押すように刺激しながら、舌での愛撫に集中しだす。

「んっ！ あ！ やあー」

たまらず体をのけぞらせると、空いた手で腰を引き寄せられてしまう。

「あー、すごい。お漏らししたみたいだ」

太ももにまでべったりと愛液が垂れているのが自分でもわかる。

ここまで来るとまともに頭が働かなくなってくる。

恥ずかしいところを見られ、舐められて未知の快楽を与えられ、正気を失っていた。

——気持ちいい……。

無意識に腰を揺らし、涼の唇に押し付けていると、目が合い、我に返り、動くのをやめた。

「いいんだよ。気持ちいいのは悪いことじゃない。体がしたいようにしてごこ

らん」

「は、恥ずかしい……」

自分でも動いていると、なにかが近づいてくる気がして、それがなんかのかわからないままに、快樂に身を委ねるしかできなかつた。

「気持ちいい？」

「ああん。やだあ、はっ……あん」

「やならやめる？」

「いやあ。ふあっん」

「わがままだなあ」

涼が指の動きを早め、唇でクリトリスを転がしながら、きつく吸引した。

コロコロと転がされるたびに、景色が歪む。

「あっ、あーっ……」

「……いつちやつたね。感度がいいだけにこれからも心配だな。無理やりな

のに感じちやうなんて」

凄まじい快樂が下腹部に広がり、がくがくと痙攣しながら浴室の床に倒れ込んでしまう。

涼は、それでもそのまま、まゆの秘部に吸い付いていた。

慰めるようにいたわるように、愛しそうに愛撫を続ける。

ひどく敏感になったところを舌で触れられるたびに、体が跳ねる。

体の力が抜けきって、もはや恥じらう気力もなく、だらしなく足を開いて、されるがままになっていた。

「全部飲みたい、舐めたい」

溢れた愛液を一滴残らず舐めとる。達したばかりで敏感だというのに、容赦なくしばらく舐め続けた。

ようやく唇が離れて、安心する。これでもう終わったのだろう。

「彼氏にされるのとどっちが感じる？」

「感じてないっ。くすぐったくて声が出ちゃっただけ」

認めたらなにをされるかわからない。本能的に恐怖で嘘をつく。

「ちゅうちゅう音がするほど吸われたら仕方がないね。まゆちゃん、抵抗も
しないであんあん喘いで、機会があればまたするでしょう」

「もう……しないっ」

「ほんとかな。ちゃんと反省してる?」

こくこくと頷く。涼は満足そうに微笑んだ。

「じゃ、証拠見せて」

「証拠?」

「うん。ここを剃ろう。そしたらもう彼氏に見せられないでしょ?」

涼が恥毛をそつと撫でる。

——剃る?

意味がわからない。

恐ろしいことを言っていることだけはわかる。

「ここ、どうしたのって聞かれて、自分で剃ったなんて言えないでしょ？ 変態みたいだもの。まして誰かにされたなんて言えないからね」

「や……怖い！」

「んー、怖くないよ。大丈夫。じっとしてて」

一度浴室から出ると、なにかのチューブと剃刀を持って戻ってきた。

「肌傷めないようにローションつけるからね」

浴槽の淵に座ったまゆの足を開かせる。

冷たいジェルをかけられ、快樂の余韻で熱をもったそこが一気に冷たくなる。

涼がもっている剃刀が怖くて、目を閉じた。

「ひあ……」

刃の当たる感触が恐ろしくて、動かないよう体が緊張して強ばる。

「ふふ。大丈夫だよ。こう見えて手先は器用だからまゆちゃんを傷つけたりしない。でも、ちよつと複雑なところだし、じつとしてね」

絶頂を迎えたばかりの秘部に、冷たい刃が当たると。

「はっ…っん。やあ」

じよりじよりと、体毛が剃り落とされる感覚は鮮烈で、体中に鳥肌が立つ。恐怖からか、感度が跳ね上がり、ちよつと触れられただけでびくんと体が波打つ。

「かわいそうに。怖いんだね。震えてる」

「なんで……」

薄目で下を見ると、すでに半分ほど終わったようで、隠れていた部分が晒されている。

「丸見えにしちゃうからね」

執拗な手つきで、一本残らず剃り落とすと満足そうな顔をしている。

しばらく恐怖に耐えていると、ようやく刃物が皮膚から離れた。刃物を当てられた恐怖に泣きだしたまゆを優しく抱くと、

「うっ」

「よしよし。よく頑張ったね」

「今日の涼くん怖い」

「ごめんね。かわいいまゆちゃんが他の男に抱かれると思うと耐えられなくて。毛がないほうが、よく見える。それに舐めやすいし」

恐る恐る、舌を見ると幼児のようにつるつるになっている。

涼がローションをそこに塗り足してから、そそりたったものをまゆの秘裂に押し付ける。

「え……」

——犯される。

そう思ったが、割れ目をなぞりながら、秘裂の上を擦るだけで中には入ってこない。

「挿れると思った？ 大丈夫だよ。初めてがお風呂じゃちよつとかわいそうだし。あとでゆつくりベッドでしようね」

意味不明なことを言いながら、体を揺らしている。

たっぷりと塗られたローションのせいで、粘着質の水音が響く。涼はまゆの両胸が歪むほど激しく揉んで、指の間に乳首を挟む。

「ローションなんていらなくらい、ぐちよぐちよだね」

「ん…っ！ ひっ…！ あああっあう…」

「ほらっ。見て、どうなってる？ 説明して」

「あ……涼くんのおっきいのが当たってる…」

粘膜がこすれるたびに、涼の先っぽからも透明な液体が垂れてきて、まゆの秘裂に垂れてくる。

鮮烈な刺激に、まゆはがくがく痙攣しながらむせび泣いた。しばらくそうしていると、涼の動きが激しさを増す。

「はっ、すごい。ビラビラに挟まれてるだけでイキそうなくらい気持ちいいよ。クリに当ててあげるからね」

「あ、はあ……あーっ。そこに当てちゃ……ひあん」

「僕の先っぽでまゆちゃんの敏感なとこにちゅーしてあげる」

「ひあっ……あうっ」

先走りに濡れた亀頭をまゆのクリトリスにくつつける。

互いの一番敏感な部分が直接交わる感じが卑猥すぎて眩暈がする。

「こっちでちゅーするのも気持ちいいね」

「あ、りよ、涼くん……駄目えええ」

「興奮して皮から出てるの見える？」

先ほど絶頂を迎えた体は、再び高みを目指して熱くなってくる。

「クリ擦らないでえ。またイっちゃう……」

「うん、今度は一緒にね？」

ちゅつとまゆの口にキスをして、そのまま腰の動きが早まる。興奮して剥き出しになったクリトリスを容赦なく亀頭で刺激され、頭の中が白み始める。

「はあーッ…やあ、もう苛めないで。怖いッ」

まゆは再び絶頂した。

「あ、かわいい、まゆちゃん。ああ、僕も出すよ」

お腹の上に白い飛沫が飛び散り、浴室に男の匂いが漂う。

口の中を舐るように舐められているうちに、ゆっくりと意識が遠ざかる。

続きは製品版でお楽しみください。

義兄の狂愛 嫉妬と独占欲

発行日 : 2022年12月12日

サークル : 箱庭の楽園

(C) 箱庭の楽園 2022

初出 pixiv & ムーンライトノベルズ

連絡先 : mail edenofhakoniwa@gmail.com

Twitter @hakoniwa2552